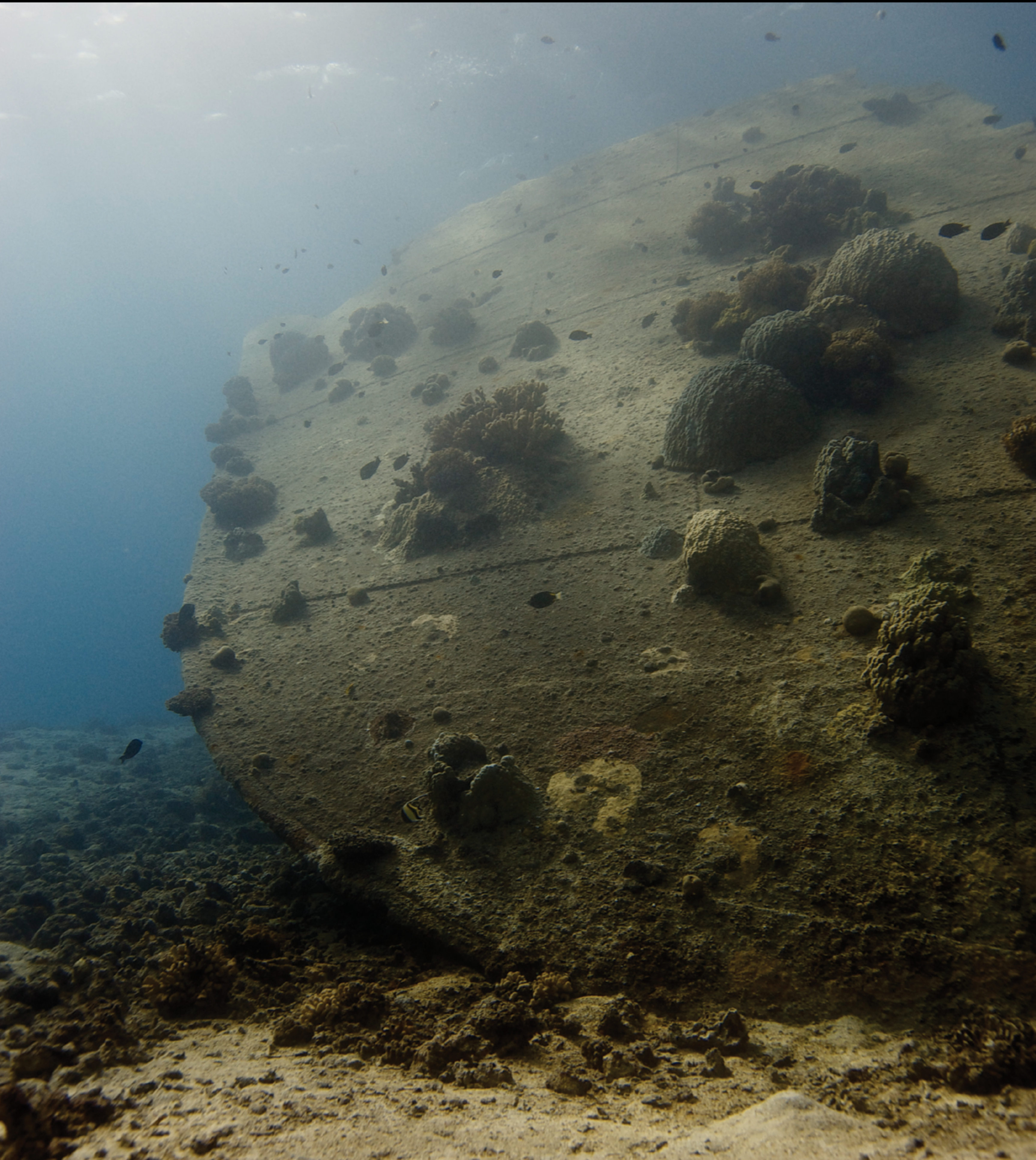


第二次大戦サイパン戦の海事遺産トレイル

WORLD WAR II MARITIME HERITAGE TRAIL BATTLE OF SAIPAN



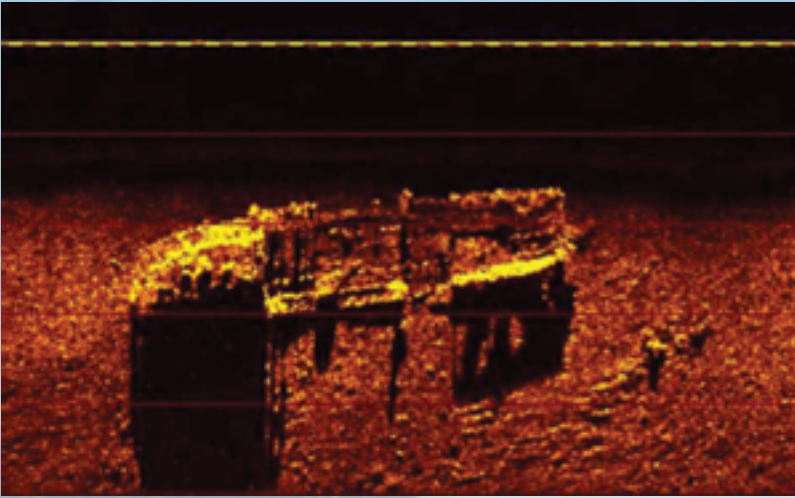
SHIPWRECKS

Image: 日本貨物船の船首



大発上陸用舟艇

大発上陸用舟艇は大戦中旧日本海軍特務上陸部隊によって使用された大型の発動機を搭載したボート(上陸用舟艇)である。歩板兼用の艇首タラップを低くして積載物と兵士を降ろせるアメリカ製の上陸艇と似ているが、大発は改良された双胴形の船体デザインによって、より優れた耐航性を備えていた。ディーゼルエンジンを動力とし、そのサイズのために相対的に長い航続距離を有した。武装として37mm口径までの武器を備えるよう改良可能で40mm砲に耐える防御を施せた。



大発上陸用舟艇の模型。左は、大発上陸用舟艇の模型。右は、大発上陸用舟艇の模型。

上陸用舟艇を見学する

2隻の大発上陸用舟艇がタナバグ環礁内、水深約11mの砂地に沈んでいます。近辺は斑点のあるトビエイ(Aetobatus narinari)の群れが出ることで知られています。ドクウツボ(Gymnothorax javanicus)が複雑な構造の機体のなかに潜んでおり、頭を潮の流れにむかって出しているところが見れます。このウツボは世界でも最も大きな種で、長さ3mにも成長します。

最初の一隻は、15°13′52.82″N, 145°43′18.95″E（55P 0362737N, 1684299E）（WGS 84）に、最も良い状態で残り、船首、船体中央部、船尾が正しくもとの位置にあります。船首乗降タラップは閉じたままですが、完全にもとの場所でロックされているわけではありません。艇の機関部の一部が船尾のもとの場所にあります。二隻目の上陸用舟艇は水深は同じに、正確に一隻目の南西約45mに位置します。全体として、劣化と損壊がより顕著です。いくつかの特徴、舵柄と舵輪、船体のフレーム、船首タラップなどは、全て崩れており、船体内部か周囲の砂地に落ちています。

大発上陸用舟艇の模型。左は、大発上陸用舟艇の模型。右は、大発上陸用舟艇の模型。



大発上陸用舟艇の模型。左は、大発上陸用舟艇の模型。右は、大発上陸用舟艇の模型。

大発上陸用舟艇の模型。左は、大発上陸用舟艇の模型。右は、大発上陸用舟艇の模型。

大発上陸用舟艇の模型。左は、大発上陸用舟艇の模型。右は、大発上陸用舟艇の模型。

大発上陸用舟艇の模型。左は、大発上陸用舟艇の模型。右は、大発上陸用舟艇の模型。

1944年2月22日と23日、サイパンにおける日本の船舶輸送と補給施設への最初の攻撃で、アメリカ軍の輸送艦エセックスとヨークタウンから出撃した攻撃機はタナバグ環礁内の全ての船に損害を与えるかもしくは撃沈。駆潜艇を沈めたという記録は無いものの、2隻の駆潜艇、第8京丸と第10京丸はこれらの攻撃によって沈んだとされる。日本の神戸にある「戦没した船と海員の資料館」のデータベースは北マリアナ諸島で沈んだ600隻の船の情報を提供する。第8京丸と第10京丸の情報について、2隻の船は実際はテニアン島のラロ岬の南端、6km西で沈んだとされる。松安丸のように、廃棄か沈没前に、2隻の船がサイパンに到達した可能性はある。異なった軍部による様々な記録と報告書にある不一致が船の沈没に関して謎を残し、考古学的な調査の必要性を強調します。



第8京丸と第10京丸、1931年の国の商船建造の規約に基づいて、1938年に日本の特設運送船として起工された。そのような理由で、捕鯨船としての使用されるように設計された。艤装後すぐに、特設駆潜艇として徴用された。鋭角な船首は高速で、クジラまたは潜水艦を補足するのに向いていた。第8京丸と第10京丸は、342トンの蒸気船であり、直立型1-2段膨張式往復蒸気機関と水管ボイラーを備えていたとされる。同様のトン数の船は48.7-64m程度の船体長をほこる。これらの船は艦橋と機関部を船中央部に持ち、船首と船尾部は武装もしくは爆雷投下機のスペースにあてられた。

日本の貨物船同様に、この船舶は1950年代の航行の障害物の除去や回収に関連した戦後処理によって影響を受けたとされる。アメリカ海洋大気圏局の海図810761によれば、残存船体は戦後処理をおこなった3.04mの深さにあることになっている。広範囲の遺跡のダメージはまた、1950年代のCIAによる破壊作訓練に使われた可能性も示唆する。1984年時点では、いくつかの弾薬類が視認でき、遺跡の残骸部に散らばっていた。近年の調査においても、まだ弾薬は確認できた。遺跡を訪れる際には、弾薬に触れたり、動かすことは慎むよう願います。連邦法によって禁止されているだけでなく、より重要なことに大変危険な行為です。



沈没船を見学する

おそらく特設駆潜艇である船は右舷を下に、水深約9.1mの砂地、15°13′57.12″N, 145°43′18.09″E（55P 0362712N, 1684448E）（WGS 84）に横たわっています。遺跡は60x15mの範囲にわたっており、その他小さな残骸が、主要残存船体の周囲にあります。大型の魚類がこの複雑な沈没船に育む生態の主要な地位を占めます。イトウダイ(Myripristis spp.)の大群、ヨスジフエダイ(Lutjanus kasmira)、オキフエダイ(Lutjanus fulvus)が船体内部のスペースに混在しています。普通サンゴが豊富なエリアで見られるタジマキンチャクダイ(Pomacanthus imperator)が残骸の下に潜んでいるのを見ることができます。大型の魚とともに見られる、ホンソメワケベラやソメワケベラはお馴染みに、大きな魚の口元で泳いでいるのを見ることができます。

40m程の船首部は大半が残り、水中写真の撮影に適しています。船首部は第二甲板まで切断されているようです。小さな昇降口があり、前部の狭い貨物室につながっています。船体の残存部はひどく損壊しているものの、残骸は船体原型ラインをとどめています。エンジンやボイラーは確認できませんが、損壊した煙突の一部が船中央部に残ります。船体中央からすぐ船尾で、船体は破片となっており、船尾、操舵装置、プロペラなどの確認はできません。遺跡全体で、船の沈没の間または以後に何があったのかを把握するのは至難です。いくつかの証拠は戦後処理の間に船体が切断または船体中央から船尾側爆破されて離れたことを示唆しています。この仮説は船体の一部が遺跡の一部である船の水路の反対側にまであることから支持されます。さらなる考古学調査がその解釈と特定のために遺跡で必要されています。

残る機体を保存する

沈没船、航空機の残骸やその他水中遺産は陸上の史跡と同じように守られます。それらは、かけがえのない資源であり、船舶や飛行機は毎日のように沈んでいます。大戦中の航空機や駆潜艇ではありません。これらの遺跡が重要であるのは、歴史の詳細を語るものであり、戦時下の人間について語るものだからです。沈没船、航空機、その他の乗物を含め、全ての水中遺産はCNMI Public Law 3-39のもとで保護されます。この法律は連邦政府が所有または管理する土地や海底に位置するあらゆる考古学上の遺跡を不法な破壊、発掘、遺物の持ち去りから保護します。連邦の海域にある史跡沈没船は自然資源同様に保護されているため、次なる世代は遺跡を訪れ、学び、私たちの特殊な水中遺産を楽しむかもしれません。

参照文献
Alden, J. D. , 1989, <i>US Submarine Attacks During WWII</i> . Naval Press Institute.
Cressman, R. , 2000, <i>The Official Chronology of the US Navy in WWII</i> . Naval Institute Press.
Jentschura, H., D. Jung, and P. Mickel , 1986, <i>Warships of the Imperial Japanese Navy, 1869-1945</i> . Naval Institute Press. 4th Edition.
Landsdale, E.G. , 1961, <i>Excerpts from Memorandum from Brig. General Edward G. Lansdale, Pentagon expert on guerrilla warfare, to General Maxwell D. Taylor, President Kennedy's military advisor on Resources for Unconventional Warfare, SE Asia, July 1961</i> . The Pentagon Papers, Gravel Edition, Volume 2:643-649.
McKinnon, J. and T. Carrell , 2011, <i>Saipan WWII Invasion Beaches Underwater Heritage Trail</i> . Ships of Exploration and Discovery Research, Inc.
Pacific Basin Environmental Consultants , 1984, <i>Underwater Survey of Tanapag Lagoon for Historic Properties</i> . Unpublished report. Prepared for the Community and Cultural Affairs Historic Preservation Office, Saipan.
SEARCH, Inc. , 2008, <i>Archaeological Survey of Tanapag Lagoon Saipan, Commonwealth of the Northern Mariana Islands</i> . Submitted to the CNMI Department of Community and Cultural Affairs, Division of Historic Preservation.

This material is based upon work assisted by a grant from the Department of Interior, National Park Service. Any opinions, findings, and conclusions or recommendations expressed in this material are those of the author(s) and do not necessarily reflect the views of the Department of Interior.

日本貨物船(推定松安丸)

地元では沈没船、またはシップレックと呼ばれるこの船は、日本の商船で1990年におそらくは松安丸と特定。戦時中には、松安丸を含めてほぼ24隻の商船がタナバグ環礁とサイパン周辺の深海に沈没している。戦時下の命令として、こうした船は特設駆潜艇、警護艇、輸送艇として運用された。非戦時下で、輸送船として使われていた船はのちの第二次大戦中に徴用されたか、外国建造の船を購入したか、戦争中に拿捕されたかしたものであった。 1869-1945年にかけて旧日本海軍の軍艦に配備された輸送船にはスコットランド、ドイツ、イギリスで建造された船が含まれる。これらの船は一般に直立型3段膨張式往復蒸気機関と水管ボイラーを備えた。これが当時の標準として、戦前に建造されたことの目印となる。

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

5,624トンの標準的な蒸気船であり、戦時中に徴収されたということが唯一分かっている。そのようなわけで、戦時下に建造された船ではない。建造年とその識別はブリッジ、機関部、船体中央部に位置する乗客スペースによる。

アメリカ軍潜水艦の攻撃記録によれば、松安丸は1943年1月27日USSホエールによってロタ島の西で魚雷攻撃を受けた。ダメージを受けたものの、不完全な魚雷攻撃で、撃沈には至らず、サイパンへの修理あるいは回収のために曳航された。潜水艦の攻撃時には、伝えられるところでは徴収した韓国兵を運んでおり、それにより沈没船の遺跡には追悼の碑がある。船は、第58艦隊のエセックスとヨークタウンからの戦闘機の空襲によって修理ができないほどに大破し、一年以上もタナバグ環礁にとめ置かれた。1950年代の港の戦後処理の間に、船舶の往来に支障となるされ、船は切断された。1949年から1962年にかけて、アメリカ中央情報局(CIA)はサイパンの北部半分の大部分を管理していた。アメリカ海軍の協力下、海軍技術訓練局(NTTU)として知られる組織が、スパイ活動、諜報、対敵情報活動、心理戦技術と破壊工作の訓練を実施した。松安丸の残骸はNTTUの爆破工作の訓練に使用されたとされている。

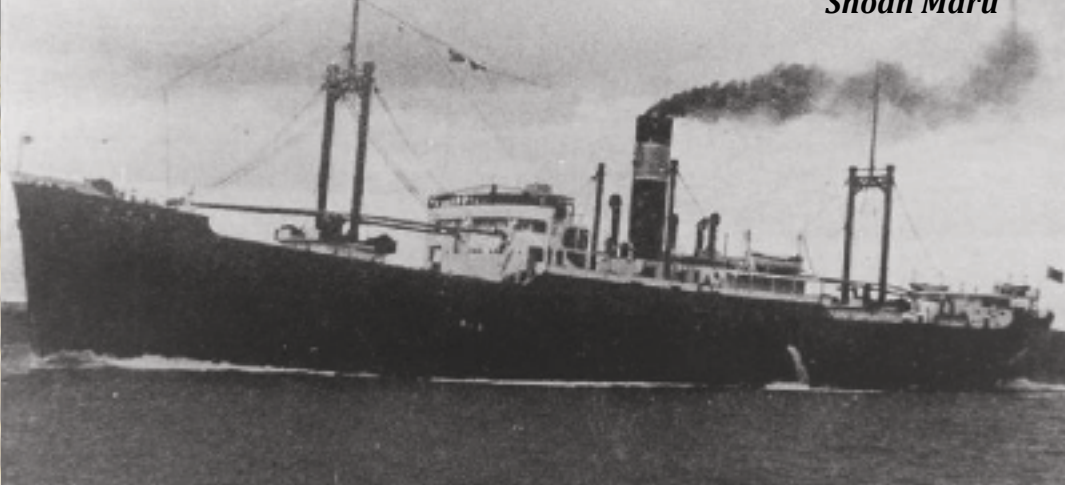
松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

貨物船を見学する
損壊した日本の貨物船は水深約10m、15°14′3.81″N, 145°43′27.5″E（55P 0362994N, 1684652E）（WGS 84）、の砂地に横たわっています。船は右舷を下に、船首を除いては無傷で残っていません。船の大半は爆破や回収作業の影響でダメージを受けていますが、エンジン、蒸気機関、操舵輪、上部構造などの主要部はほぼもとの位置にあります。かつては、2、3の自転車が貨物エリアに見えていましたが、ここ何年かは確認されていません。松安丸のおおよその船体長は125mですが、残骸は海底の約274m以上の範囲に散らばっています。これは回収・爆破作業によるものと思われる。

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

残存する機体に育む海洋生物は豊富で季節によって変化します。垂直にこのる残骸が大型の魚を多く引きつけます。パラフエダイ(Lutjanus bohar)は残骸の端を泳いで、船首部の強い潮のなかで群れをなしています。ハゲブダイ(Chlorurus sordidus)が藻を求めて船体を泳ぎ回っています。アカヒメジ(Mulloidichthys vanicolensis)の群れが、船下側に隠れています。ヘラヤガラ(Aulostomus chinensis)もまた船下側に隠れているのを見つけることができます。この沈没船に生息するのは斑点のある茶色の種ですが、明るい黄色をした種が他の地域で見られます。

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数



松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

松安丸の歴史についてわかっていることは少ない。1937年に建造された総トン数

